社会からの学校支援（ ）

- 地域ボランティアとして参加して -

The School Support from the Society()

- Through the participation as the Area Volunteer -

学習過程臨床分野

藤井 喜英

[要約]「生きる力」「特色ある学校づくり」さらには「総合的な学習の時間」の新設により、学校と社会との連携が推進されている。本研究では、NPO、地域の人材活用について、具体的には高校の理科教師が小学校の授業に参画する(異校種人材活用)ことがどのように可能か、昨年度からの活動から担当者自身の振り返り、子どもたちの学びの実態、受け入れた学校や教師の反応など、学校と社会の連携の問題点と課題を検証する。

[キーワード] 地域ボランティア, 学社連携, NPO, 外部講師, 異校種人材活用

1 はじめに

平成8年7月に第15期中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」がきっかけとなり、学校と家庭・地域の連携が組み込まれることになった。また、「総合的な学習の時間」の新設に伴い、身近な地域の人材や専門的な知識を持った社会人が授業者として学習に参画し、課外活動等において指導する学校支援ボランティアへの期待が高まっている。

この学校支援ボランティアの活用により、多様な教育活動の展開が可能となるだけでなく、学校・家庭・地域の連携が深まり、学校の教育方針や教育活動に対する地域の理解も高まるものと考えられる。

今回報告する小学校でのクラブ活動においても、子どもたちの多様な希望に応えるとともに、学校・家庭・地域の三者が子どもを育てることをねらいとして、毎年、回覧板等による呼びかけを行い実施している。

昨年度開設されたクラブでボランティアによる指導が行われたものには、科学実験クラブ、英会話、ゲートボール、ペタンク、手話、華道、箏曲、書道、金管アンサンブルなどがあつた(今年度も9月4日から開始されたが、クラブ総数17のうち15のクラブが外

部講師により運営されることになっている)。

本研究の目的は、学校と社会との連携が推進されているが、地域の人材の活用、具体的には高校の理科の教師が小学校の授業へ参画することがどのように可能か、問題点と課題を把握する事である。

2 方法

科学実験クラブの立ち上げ、計画、実践する。およそ半年の活動を通して、担当者自身の振り返り、子どもたちの学びの実態、受け入れた学校や教師の反応などを通して、学校と社会の連携を検証する。

3 実施内容

(1) 計画

2時間連続の展開のため、子どもたちの活動を中心とした。また、理科実験室という特別な空間だけでなく、家庭でも簡単にできる実験装置および材料と資料を準備し、安全面に関しては十分配慮した。

また、クラブで使用するために制作した実験装置やあまった実験材料は、先生方に使ってもらえるように、理科準備室においてもらった。

(2) 実施方法

期間は平成13年9月から平成14年2月の6ヶ月間で、基本的に第1・第3土曜日の2・3限に実施した。(休み時間を含め115分の活動だが、毎回休み時間を意識せず実施した)

対象学年は4～6年生の希望者で異学年での班編制で、一班あたり3～4名の11班で実施した。

実施テーマは以下の通りである。

(3) 活動内容・テーマ

プチロケットを飛ばそう
スライムをつくろう
アルコールPETロケットを飛ばそう
身近な酸性・アルカリ性
うがい薬で調べよう
ろうそくの科学
熱気球を飛ばそう
電気を使って
鉄を取り出そう 他。

実施する際のコンセプトとして、「五感をフルに使う」、「特殊なものを使わず、身近なものでやろう」という二点を考慮し、さらに子どもたちの希望を聞き入れてテーマを決定した。

3 子どもたちの活動から

すごく身近なもので、科学ができてすごいと思った。まわりのものに気をつければ、自分でも何かができるんじゃないかと自分でやっていくこと。

たくさんの物質があってそれぞれがとても大切なこと。

小学生でも身近なものを使って簡単に色々な実験ができること。

身近なものには科学の考え方が使われていてビックリした。

身の回りにあるもので色々なものが作れるし、ものの性質などもわかる。

身の回りにあるもので少し工夫をすればいいものができること。

家にある身近なものでいろいろな実験ができる科学の力のすごさ。

身近なものでたくさんのおもしろい実験ができるんだなあ。

身近なものが使い方次第でいろいろなことができる。

以上は、子どもたちの記録に書かれていた

ものである。すべての子どもの記録の中に「身近なもので」、「科学っておもしろい」という事柄が書かれていた。また、今年度展開されている授業中に昨年度のクラブで触れたことを思い出して「これってなんだよ」と自慢げに説明を始めたことに担任が驚いたということも聞いた。

4 結果と今後の課題

理科専任の少ない小学校にAST (Assistant Science Teacher) のような立場で高校教員が授業等へ参画していくことで、次の事が可能となった。

校種の異なる教員が入るメリットとしては、Assistant (単なる助手という立場) というより Associate (同僚・連携者) として振る舞うことが比較的容易であった。

クラス担任の教師自身が授業に関心が高く、子どもとともに積極的な学習支援が見られた。

理科の授業(教科書的内容)とはほとんど関連のない実験活動に子どもは強い興味を持つことができた。

今後、校種の異なる教員だけでなく、民間非営利組織NPO (Non profit Organization 又は Not-for-profit Organization の略) を含めて地域の人の学校参画がどのように可能か、現在ボランティアとして参画している小学校だけでなく、異年齢集団である中・高、さらには大学までの連携も視野に入れた「総合学習」の実践から検討を深めたい。

[参考資料]

葉養正明 編集 学校管理職スキルアップ講座 4
高めたい地域・家庭と連携する力 教育開発研究所
2001

学校支援ボランティアの活用の状況と課題

<http://www.edu-ctr.pref.nagano.jp/kjouhou/kiyou6/ksy.pdf>

連絡先 pakila@lilac.plala.or.jp